

「日本のことば遊び」

群馬県立女子大学 北川 和秀

1、導入1（数え歌）

・お手玉歌

- 一番はじめが一宮
- 三また讃岐の金毘羅さん
- 五つ出雲の大社
- 七つ成田の不動様
- 九つ高野の弘法様

*別バージョン

- 一番はじめは一の宮
- 三は佐倉の宗五郎
- 五は出雲の大社
- 七つ成田の不動様
- 九つ高野の弘法様

*このあとに、

これほど心願掛けたのに 浪子の病は治らない ごとうごとうごとうなる汽車は
武雄と浪子の別れ汽車 二度と逢えない汽車の窓 鳴いて血を吐く不如帰
と続く（これにも多くのバージョンあり）ものもある。

・京都の東西の通りの数え歌

- まるたけえべすにおしおいけ 丸太町・竹屋町・夷川・二条・押小路・御池
- あねさんろつかくたこにしき 姉小路・三条・六角・蛸薬師・錦
- しあやぶつたかまつまんごじよう 四条・綾小路・仏光寺・高辻・松原・万寿寺・五条
- せつたちやらちやらうおのたな 雪駄・（鍵屋）・魚の棚
- ろくじようさんてつとおりすぎ 六条・三哲
- ひつちようこえればはつくじよう 七条・八条・九条
- じゆうじようとうじでとどめさす 十条・東寺

2、導入2（尻取り歌）

・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは屋上、屋上は怖い、怖いはおばけ、おばけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはオヤジの禿頭

*別バージョン1

・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蛙、蛙は青い、青いは葉っぱ、葉っぱは揺れる、揺れるは地震、地震は怖い、怖いはおばけ、おばけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはオヤジの禿頭

*別バージョン2（古そう。すみません。ちよつと汚い）

・いろはに金米糖、金米糖は甘い、甘いは砂糖、砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は赤い、赤いはホウヅキ、ホウヅキは鳴るよ、鳴るのはおなら、おならはくさい、くさいはうんこ、うんこは黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは十二階

※「十二階」は、浅草公園にあった凌雲閣の俗称。展望台兼レストランで、明治二三年（一八九〇）完成。東京一の高さを誇る建物として連日見物客でにぎわった。大正一二年（一九二三）の関東大震災で、八階部分から折れた。

3、万葉集のことば遊び・文字遊び

① たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶ（馬声 蜂音）せくもあるか妹に逢はずして
(一一・二九九二)

② 若草の新手枕を枕き初めて夜をや隔てむ二八十一あらなくに
(一一・二五四二)

③ ……わが着たる 衣は穢れぬ 見るごとに 恋はまされど 色に山上復有山ば 人
知りぬべみ…
(九・一七八七)

④ 海津路乃 名木名六 時毛 渡七六 加九 多都波二 船出可為八
海つ路の和ぎなむ時も渡らなむ斯く立つ波に船出すべしや
(九・一七八二)

⑤ 言云者 三々二田八 醉四 小九毛 心中二 我念羽奈九二
言にいへば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに
(一一・二五八一)

⑥百済野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴尔鷄鵲鳴
百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも (八・一四三一)

⑦淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三
よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よき人よく見 (一・二七)

⑧来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを
(四・五二七)

⑨ 霍公鳥を詠む二首
霍公鳥今来鳴き始む菖蒲蕩くまでに離るる日あらめや毛能波三箇の辞を闕く
(一九・四一七五)

わが門ゆ鳴き過ぎ渡る霍公鳥いや懐かしく聞けど飽き足らず毛能波氏乎六箇の辞を闕く
(一九・四一七六)

尼の、頭句を作り、大伴宿祢家持の、尼に詠へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首
(八・一六三五)

⑩佐保川の水を塞き上げて植ゑし田を尼作る 刈る早飯は独りなるべし家持續ぐ
(八・一六三五)

⑪鑑子に湯沸かせ子ども櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ
さしなべに、湯を沸かせよ、人々よ。櫛津の檜橋を渡つて、コンコンと鳴いて来る狐に浴びせてやろう
右の一首は、伝へて云はく、一時に衆集ひて宴飲しき。時に夜漏三更にして、狐の声聞ゆ。爾乃衆諸興麻呂を誘ひて日はく、この饌具、雑器、狐の声、川、橋等の物に掛けて、但に歌を作れといへれば、声に應へてこの歌を作りきといふ。
(一六・三八二四)

4、懸詞(掛詞)

波が立つ
風ふけば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ
龍田山(地名) (古今集九九四)

5、物名歌

いさゝめに時待つ間にぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつゝ
(古今集四五四)
(かりそめにその時を待っているそのあいだに、日は経ってしまった。わたくしの気

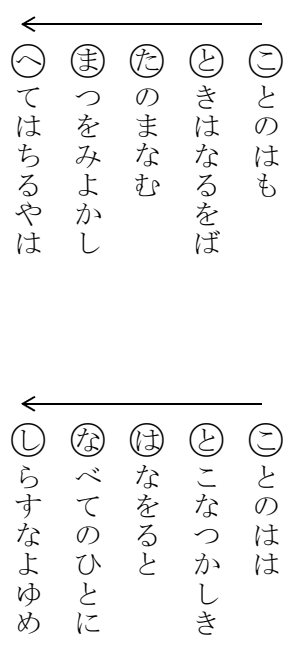
持をあの方にたびたび見えるようにしていながらも。笹、松、枇杷、芭蕉葉をよみこむ

6、折句

①むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りみて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上(かみ)にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば
はるばるきぬる旅をしぞ思ふ
とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。
(伊勢物語 第九段)

②言の葉も常盤なるをば頼まなむ松を見よかし経ては散るやは(小野小町)
言葉も不変であるのを頼りにして欲しい。松をご覧なさい。時が経つても散つたりしません。
言の葉は常懐かしき花折るとなべての人に知らすなよゆめ(応えた人の歌)
あなたの言葉はいつも懐かしい花を折るようだと、他の人達には決して知らせないでくださいな。
(『新撰和歌髓脳』(平安時代の歌論)に見える)



*小町は「琴たまへ（琴を貸してください）」と頼んだのに、相手は「琴は無し」と断っている。

- ③
- あ くびがでるわ
 - い やけがさすわ
 - し にたいくらい
 - て んでたいくつ
 - ま ぬけなあなた
 - す べってころべ

（谷川俊太郎の作品）

*けなし言葉の羅列であり、単純に読めば女性からの「さようなら」のようであるが、各行の最初の字を拾うと「あいしてます」ということばが浮かび上がる。

7、沓冠の歌

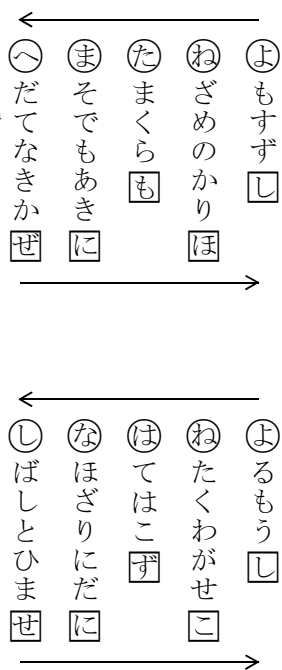
・夜も涼し寝覚めの仮庵手枕も真袖も秋に隔てなき風（兼好）

夜も涼しい。目が覚めたこの仮の廬では、腕枕も衣の袖も変わらない秋風が吹いて行く。

・夜も憂しねたく我が背子果ては来ずなほざりにだにしばし訪ひませ（頼阿）

夜もつらい。憎たらしくもあなたはついに来ない。たとえかりそめの気持ちでも良いから、しばらく訪ねてきてください。

（『続草庵集』（南北朝時代の歌人、頼阿の歌集）に見える兼好との贈答歌）



*兼好は「米たまへ、銭も欲し」と頼阿に無心し、頼阿は「米はなし、銭少し」と返している。句頭の連続と、句末の連続とに意味を持たせている歌を「沓冠の歌」という。

8、「いろは歌」の類

①あめつち

・あめつちほしそらやまかはみねたにくもきりむろこけひといぬうへすゑゆわさるおふせよえのえをなれあて（四八字）

・天地星空山川峰谷雲霧室苔人犬上末硫黄猿生ふせよ榎の枝を慣れ居て

*「えのえ」と「え」が重複しているのは、平安初期にはア行のエとヤ行のエとの間に音韻の別があったから。「榎」のエはア行、「枝」のエはヤ行。

*「あめつち」で始まるのは、『千字文』が「天地玄黄」で始まるのに倣ったものと考えられている。

②たみに

・たみにいでなつむわれをぞきみめすとあさりおひゆくやましろのうちゑへるこらもはほせよえふねかけぬ（四七字）

・田居に出で、菜摘む我をぞ君召すと、漁り追ひ行く山城のうち酔へる子等、藻葉干せよ、得船繫けぬ

③いろは

・いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうののおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす（四七字）

・色は匂へど 散りぬるを 我が世たれぞ 常ならむ 有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず

*「いろは歌」の全文は承暦三年（一〇七九）の『金光明最勝王経首義』に万葉仮名で書かれているのが現存最古

④とりなくこゑす

・とりなくこゑすゆめさませみよあけわたるひんがしをそらいろはえておきつべにはふねむれぬもやのうち（四八字）「ん」を含む

・鳥啼く声す、夢覚ませ、見よ明け渡る、東を、空色染えて沖つ辺に、帆船群れぬ、靄のうち

*明治三十六年に、『万朝報』（黒岩涙香が主宰する新聞）で募集し、その第一位になったもの。埼玉県の坂本百次郎氏作。

9、回文

a 新聞紙（しんぶんし）、八百屋（やおや）、トマト

竹屋が焼けた（たけやがやけた）、磨かぬ鏡（みがかぬかがみ）

ダンスが済んだ（だんすがすんだ）、私負けましたわ（わたしまけましたわ）
世の中ね、顔かお金かなのよ（よのなかね、かおかおかねかなのよ）

b 手袋（てぶくろ） ↓ 六撲て（ろくぶて）

わたしカスミ草（わたしかすみそう） ↓ 嘘、見透かしたわ（うそみすかしたわ）

気付け！、細部に（きづけさいぶに） ↓ にぶい酒好き（にぶいさけずき）

c 山本山、日曜日、水道水、中継中、馬車馬、大阪大、三笑亭笑三、三遊亭遊三

d 赤坂（AKASAKA）

①むら草に草の名はもし備はらばなぞしも花の咲くに咲くらむ

（『奥義抄』「草花を詠む古歌」）

* 『奥義抄』は平安後期の歌論書。

②長き夜の十（あるいは遠か）の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな

（なかきよのおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな）

* 江戸時代に、よい初夢を見るように枕の下に入れた宝船の絵に書いてあった歌。

この歌は中国で万曆二十年（一五九二）刊行の『日本風土記』にも見える。



浦和で蒔いた、ははは、と母は大麻で笑う

『またたび浴びたタマ』（村上春樹・文、友沢ミミヨ・画。文藝春秋）

- 7 -

10、パロディー

・ 菜もなき膳にあはれは知られけり鴨焼き茄子の秋の夕暮れ（唐衣橘洲）

* こゝろなき身にも哀はしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮 （新古今集三六二）

・ ほととぎす鳴きつるあとにあきれたる後徳大寺のありあけのかほ（四方赤良）

* ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる （千載集一六一）

11、なぞ、無理問答など

・ 上は大水、下は大火事、何だ？（なぞなぞ）

・ ゆがんだ松とかけて何と解く 郵便屋さんど解く その心は？（三段なぞ）

・ 一枚でも煎餅とはこれ如何に 一個でも饅頭と言うが如し

一羽でも鶏とはこれ如何に 一羽でも千鳥と言うが如し（無理問答）

・ 下戸にご飯（猫に小判）（地口）

・ 恐れ入谷の鬼子母神、その手は桑名の焼蛤、おっとガッテン承知の助、
来たか長さん待ってたほい、結構毛だらけ猫灰だらけ（無駄口）

12、文字遊び

・ 吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらむ （古今集二四九）

（吹くとともに秋の草木がしおれるので、なるほど山風を「あらし」と言うのだから。）

・ 戀（恋）……いと（糸）し、いと（糸）しと言う心

・ 櫻（桜）……二階（貝貝）の女が気（木）に掛かる

・ 八十八歳を米寿、七十七歳を喜寿（喜の字の崩し字から）、九十歳を卒寿（卒の字の崩し字から）、九十九歳を白寿（百に一画足りない）

- 8 -